

第6回 英語辞典の行方 電子辞書と i-pad

ここでは生徒や学生などが利用する英語辞典を中心に上げたい。さらには学校側（高等学校の場合）から英語辞典を指定する場合もある。

電子辞書は学校教育現場において急速に広がっている一方、使用に対して消極的な姿勢もあるのが現状といえる。一般的に言えば、従来の紙の辞書に対する各指導者の考え方よりも、電子辞書に対する考え方の方が顕著に現れる傾向があり、それ故、電子辞書の推薦の指定の有無は各学校や指導者の色が出る部分ともいえよう。⁽¹⁾

いわゆる従来型の紙英語辞典と電子辞書に焦点をあて、今後デジタルコンテンツが英語教育、ひいては教育や研究にどのような影響を与えるかを考えてみたい。

1 教育方法及び技術（情報機器及び教材の活用を含む）との関連

「第5回 『教職に関する科目』から見た英語科教員養成」でも触れたが、昨今の I T C (Information Technology Communication) の流れから教員も computer, internet に代表されるようなデジタルコンテンツを抜きにしては授業自体も成り立たなくなる可能性が強くなってくるだろう。これまではテープ、CD、DVD などの利用等で済まされていたものも、今や I T C はそれ以上に進み、教育界全体にこの動きは入り込んでいる。特に2010年5月に i-pad が販売されると、電子書籍や電子教科書といったことが一気に話題となり、その流れは現在出版業界を大きく揺るがしている。

現在の教職課程の教育課程では、「基礎科目」において「情報機器操作」が必修となっており、さらに「教職に関する科目」においては、「教育方法及び技術（情報機器及び教材の活用を含む）」が配置されている。教員

は教科に関係なく、情報機器等に関してはある程度扱えることが前提でスタートすることとなる。この意味でも電子辞書をどう考えていくのか、また、デジタルコンテンツをどう考えていくかは、単なる英語辞典についての見識を深めるだけでなく、教材研究、教材開発などの観点からみても今後さらに重要な内容となるだろう。

2 紙媒体の英語辞典

①日本の英語教育史と英語辞典

日本の英学史や英語教育史を振り返ると、何を英語教育とするかで先ず議論の分かれるところであろうが、1808年のフェートン号事件により、江戸幕府は英語の必要性を強く感じ、1814年に『諸厄利亜語林大成』の編纂に務めた。その後、1853年にはペリーが来航し、日本の鎖国政策が打ち破られ、明治維新へとつながった。外国語の考え方が、まずは漢語を除けば、江戸時代は、蘭語が日本にとっては国際語という考え方になる。蘭語を通していわゆる外国を知るといった具合である。日本にとって外国語の中心が蘭語から英語へ、そして、国際社会におけるイギリス、アメリカの台頭と英語との関係は切り離して考えることはできなくなった。明治維新後は1872年の学制頒布、1886年に学校令公布、1890年に教育勅語發布。戦後になってからは、1947年には教育基本法、学校教育法の公布。新制中学校が発足すると、義務教育で英語が導入されるようになり、『学習指導要領 英語編（試案）』も作成された。国際関係はもとより日本の国内状況等、時代背景をとらえながら、英語公用論を意識しながら日本の英語教育の今後についても考察していきたい。

19世紀の日本の英語教育を明治維新以前を中心に少し考えるには、日本の英語教育を考える前に、日本の外国語教育史についてふれておきたい。しかし、ここでは漢語を除くものとし、いわゆる洋学が蘭語から英語へと移り変わっていくあたりに注目していきたい。19世紀以前の日本の英語教育を考える前に、日英交流史や日米交流史を考察しながら、まずは「日本と英語」の関係史について触れておきたい。江戸時代には

「日本政府」という考え方がないので、江戸幕府が打ち出す政策がおおきな影響を及ぼすこととなる。

一般的に日英交渉史は1600年にリーフデ号が現在の大分県に漂着したことに始まる。同船の水先案内人であったウィリアム・アダムズ (William Adams, 1564-1620) が20年にわたって徳川家康・秀忠のいわゆる外交顧問を務めた。その間にイギリス国王ジェームズ一世 (James I, 1566-1625) の国書を日本語に翻訳、家康の返書を英訳したと言われている。このことは日本と英語の歴史を考える上で、その第1歩となる。⁽²⁾

1639年に鎖国が完成されると、オランダと中国(清)を除く外国とは国交を断絶したことになる。これにより、漢語を除けば、必然的には蘭語(オランダ語)が国際語ということとなる。幕府が外国語に限らず学問等に統制をかける契機となったのは、天明の大飢饉である。低下した幕府の指導力を取り戻すために、老中松平定信は1790年に寛政の改革を行った。その中の学問統制が寛政異学の禁である。儒学のうち、農業と上下関係の秩序を重視した朱子学を正学としたのである。尾藤二洲(1745-1813)が寛政異学の禁を主唱し、松平定信の教学方針に多大なる影響を及ぼしたのである。1797年には昌平坂学問所が幕府の直轄になった。さて、国内で江戸幕府がどのような政策をとろうが、外国船は次ぎ次ぎと日本にやって来るのである。蘭語(外国語)を知るといよりは、蘭語を中心にして洋学への関心が高まったと言える。幕府に英語(イギリス)を意識させたのが、1808年のフェートン号事件である。これはオランダ船を装ってイギリス軍艦フェートン号が長崎に入港したものである。⁽³⁾ この事件は、すでにヨーロッパでのオランダの国力が低下していたことが関係している。鎖国とは「幕府が情報を独占し、貿易を一元的に管理する体制のこと」⁽⁴⁾で、その幕府の情報源がオランダであったのだ。従って、オランダからの情報をもとに幕府は外交政策を決めていくことになった。しかし、この事件を契機にイギリスの台頭を知るようになった幕府は、英語の必要性を感じることとなり、翌年の2月より蘭学通詞6名に英語学習を命じた。その後、2名、6名と追加されたが、結局は蘭学通

詞全員に英語とロシア語の学習が命じられることとなったのである。指導者にはアイルランドの英国陸軍に勤務し経験のある、オランダ商館副商館長として赴任してきたブロムホフ (John Cock Blomhoff, 1779-1853) がオランダ商館長から推薦された。その後、1811年に本木正栄を中心とする長崎通詞の努力により、英単語や会話文を所収した『諳厄利亜興学小筈』、1814年に日本で最初の英和辞典『諳厄利亜語林大成』が発表されたのである。その後1830年にイギリスから上海に着任した宣教師領事ウォルター・メドハースト (Walter Henry Medhurst, 1796-1857) (麦都思) が英語と対応する日本語の書物を著わしたとされている。⁽⁵⁾

1840年にはリンドレイ・マリ (Lindley Murray, 1745-1826) の *English Grammar* (1794) のオランダ語からの重訳を澁川敬直 (六蔵) 訳『英文鑑』が刊行され、1856年に幕府の洋学所を蕃書調所と改めて、蘭学を主として英学を副とした教育機関としての機能を持つようになった。当時は外交文書の翻訳は長崎の阿蘭陀通詞と江戸の天文台付属の蕃書和解御用掛が担当していたが、後者が強化されたことになったのだ。⁽⁶⁾ 1858年には幕府は長崎に英語伝習所を開設。1859年に中浜万次郎『英米対話捷徑』が刊行。1860年に蕃書調所で英学が正科とされたことは注目しなければならない。1862年には洋学調所、1863年に開成所と改称、幕府崩壊まで洋学の研究・教育の中心となってきた。⁽⁷⁾ その後は以下のような出版物がある。

1862年 堀達之助『英和对訳袖珍辞書』

* 原本は H. Picard, *A New Pocket Dictionary of the English and Dutch Languages* (1857)

1863年 『英吉利文典』(開成所)

* 原本は *The Elementary Catechisms, English Grammar* (1850)

1866年 J.C.Hepburn・岸田吟香共編『和英語林集成』

* 日本で最初の和英辞典。

この時期、英語の必要性を強く感じていた人物のひとりに福澤諭吉（1835-1901）がいた。1859年に福澤は横浜見物に出掛け、英語の必要性を強く感じたと言われている。いわゆる「英学発心」である。『福翁自伝』の中に次ぎような一節がある。

實に落膽して仕舞た。是れは、どうも仕方がない、今まで數年の間死狂物ひになつて和蘭の書を読むことを勉強した、其勉強したものが、今は何にもならない、商賣人の看板を見ても讀むことが出来ない、左はとは誠に詰らぬ事をしたわいと、實に落膽して仕舞た。けれども決して落膽居られる場合でない。彼處に行れて居る言葉、書いてある文字は、英語か佛語に相違ない。所で今世界に英語の普通に行れて居ると云ふとは豫て知て居る。何でもあれは英語に違ひない、今我國は條約を結んで開けかゝつて居る、左すれば此後は英語が必要になるに違ひない、洋學者として英語を知らなければ迎も何も通ずることが出来ない、此後は英語を読むより外に仕方がないと、横濱から歸た翌日だ、一度は落膽したが同時に又新に志を發して、夫れから以来は一切萬事英語と覺悟を極めて...⁽⁸⁾

これまでの蘭語学習から英語学習への大きな転換である。時代の流れ、今で言えば、グローバル時代の到来を横浜見物で実感したのである。明治維新以前の英語教育は、英語学習論的な内容の強い時代であり、英語の必要性が強く求められた時代である。

②学習用英語辞典

日本人的に英語辞典を大別すれば、英和、和英、英英になろう。最近のものでは英和+和英といったものも出版されている。おもにコンパクトなものに多い。ここでは英和辞典を中心に取り上げておきたい。

伊村元道『日本の英語教育200年』（2003）は「学習辞典」の定義とし

て、河村重治(1887-1974)の『新クラウン英和辞典』(1954)のものを取り上げている。

学習辞典としての本書本来の性格の上には何らかの変更も行われていない。編者がこゝに学習辞典と呼ぶものは、英単語に対して単なる日本語訳を与えるいわゆる英和辞典ではなく、なお進んで言葉の下にひそむ言語的又は文化的内容を理解せしめ、学習者の真の教養資すると共に、言語の運用面においても、豊富な用例の学習によって学力の確実な基礎を築くことを目標として編集された辞書という意味である。⁽⁹⁾

その後、河村の仕事を手伝った田島伸悟(b.1932)の『英語名人 河村重治郎』(1983)を紹介し、河村の学習辞典観を5つの観点にまとめているが、⁽¹⁰⁾ これをさらにコンパクトにまとめてみたい。

- 1 学習辞典にそんなに多くの語数は必要ではない。『クラウン』の見出し語は2万8千語。
- 2 1語義についての訳語は原則として3つまで。
- 3 語義は意味の流れを重視。文型表示や可算・不可算表示もしない。
- 4 句用例と文用例、「無色のもの」と内容のある「色もの」とのバランスが重要。
- 5 挿絵については初版では1300頁中に2500個を掲載し、改訂の際には削った。

ここには学習辞典だけでなく、いわゆる出版物としてどう辞書をどう考えるかといったことも含まれている。特に、学習者の段階に応じて学習辞典はその初期に当たるものを指すことから、収録語数は控え目で、訳語もできるだけ精査することが大きな特徴となろう。最初の1)及び2)が最もたる特徴でないだろうか。情報は多ければ多いほどよいという神

話的な観念がある一方、情報は多ければ多いほど、必要なものに辿りつけないという大きなマイナスもある。これはインターネット検索ではいつも問題となるところだ。必要以上の情報を与えることで混乱を招くようであれば、与える情報を始めから少なくすることもある種必要という考え方が河村には見てとれる。

3 電子辞書とi-pad等のデジタルコンテンツ

2010年5月にi-padが登場するとITC教育が声高に叫ばれるようになり、e-book、電子書籍、電子教科書への期待が高まっている。これはかつて図書館がカード検索からコンピュータ検索へ変わった状況と似ている。ここではデジタルコンテンツに注目していきたい。

①電子辞書

電子辞書についてまず一般的な定義をしておきたい。『広辞苑』（第6版）には次のような定義がある。

【電子辞書】CD-ROMに収めたりネットワークで流したりして、コンピュータで利用する形態の辞書。また、辞書などのデータを内蔵した、小型の専用コンピュータ装置。⁽¹¹⁾

また、インターネット上には次のような定義もある。

《 electronic dictionary 》辞書のデジタルデータを内蔵した携帯型の電子機器の総称。高機能のものでは、液晶ディスプレイなどの表示装置と、キーボードやスタイラスペンなどの入力装置を備え、見出し語検索のほか、全文検索、部分一致検索、複数辞書の一括検索といった多様な検索方法を選択することができる。また、同様の機能を提供するアプリケーションプログ

ラムやインターネット上のサービスを指すこともある。⁽¹²⁾

電子辞書（でんしじしょ）は、CD-ROMやフラッシュメモリなどの物理的な媒体やネットワーク上に保存されている辞書・事典の内容を、コンピュータによって検索・表示などを行う装置またはソフトウェアの総称。その指し示す範囲は広範だが、携帯型の専用装置を指すことも多い。かな漢字変換に連動する機能として実装する例もある。特徴としては、紙の辞書に比べて高速な検索ができる 場所をとらない（何百冊分もの辞書の情報量を小さな記憶装置に集約できる） 大量の情報を入れることができる（前記参照） 全文検索・部分一致検索など、多様な検索ができる などがある。⁽¹³⁾

電子辞書もデジタルコンテンツのひとつとして今では生活の場や教育現場では利用されていることは言うまでもないことだ。

電子辞書専用機の高機能化はとどまるところを知らない。収録辞書数の増大と多様化だけではなく、特に発音機能と外部記憶媒体による辞書の追加機能が大きな変化である。⁽¹⁴⁾

電子辞書の特徴としては以下の4点があげられよう。

- 1 紙の辞書に比べて高速検索が可能
- 2 大量の情報を小さなスペースで集約
- 3 保管場所をとらない
- 4 検索が多様化

関山健治(b.1970)の「電子辞書の歴史とこれから」によれば、電子辞書は4世代に分れると言う。⁽¹⁵⁾

第1世代：カタカナ表示の「電子化された単語集」

第2世代：漢字仮名交じり表示と収録語数の増加

第3世代：フルコンテンツIC辞書の登場

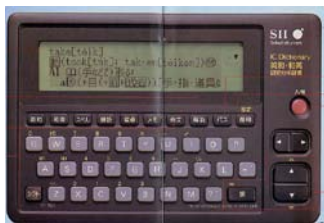
第4世代：より高機能に、より小型軽量に

第1世代ではまず電子辞書の誕生。国産第1号機は1979年11月にシャープから発表されたIQ-3000である。当時は電訳機と呼ばれていた。収録語数は英和が2800語、和英5000語。日本語はカタカナ表示であった。1978年に東芝が初の日本語ワードプロセッサ、JW-10を発表するなど、この時代にこうしたデジタルコンテンツが誕生している。



第2世代の大きな特徴は表示に漢字仮名まじりということで、英和辞典で約3500語程度を収録していることだ。この代表は1987年にサンヨーから発売された電字林だろう。英和辞典35000語、和英辞典20000語。レベル的には高校初級程度ということになるだろう。大きさや電池寿命の点では便利さにやや不足する。1990年にはソニーが電子ブックプレーヤーも発売された。8センチのCD-ROMを収納したものであるが、値段等も電子辞書よりも高額なこともあり、一般への普及は低いので、ここでは言及のみに留める。

第3世代は電字林の発売からわずか4年後の1991年にフルコンテンツIC辞書が登場した。これは紙媒体辞書をそのまま収録したタイプである。セイコー電子工業のTR-700はその代表とも言えるだろう。研究社の新英和・和英辞典、Rogé類語辞典を収録した。



第4世代はよりTR-700より高機能に、より小型軽量への傾向となり、その代表としては1999年12月にセイコー

から発売されたSR-8000が挙げられよう。⁽¹⁶⁾電子辞書は必ずしも英語辞典に特化されるわけではないが、英和、和英、広辞苑といったものを搭載するのが定番となり、これに百科事典類なども加わり、その内容は充実する一途を辿っている。



現在では電子辞書にワンセグ機能が加わり、TVなどを視聴できるものや、SDカードにより写真データ(JPEG)を読み込んでスライドショーのできるものなど多機能化されている傾向にある。また、電子辞書は一度購入してしまうとデータの追加や更新が出来なかったが、これも現在では可能になったものが登場している。特にインターネットを通じてデータを取り込めるようになったものもある。電子辞書にオンライン辞書的な要素が加わったことで、電子辞書も進行し続けている。

なお、「ネットリサーチのDIMODRIVE『電子辞書』に関するアンケート」(2006年2月1日～7日、7327人)の結果は以下の通りである。

- 電子辞書の所有率、30代は2割、60代以上は5割
- 電子辞書を使うのは、「パソコンが近くに無いとき」、「手書きのものを書くとき」
- カシオ、シャープは「画面の大きさ」、キヤノンは「軽さ」がお気に入りの理由
- 電子辞書は、「家電量販店」の「店頭で見て」購入する
- 毎日使う人の77.5%が、電子辞書は「とても役に立っている」
- 使用したことがない理由は「パソコンや携帯で調べられるから」…48.0%

調査方法	インターネットを利用した市場調査				
調査期間	2006年2月1日(水)～2月7日(火)				
調査対象者	DIMS DRIVEモーター 7,327人				
性別	N	%			
男性	3156	43.1			
女性	4171	56.9			
年代	N	%			
10代以下	79	1.1			
20代	1275	17.4			
30代	2547	34.8			
40代	2066	28.2			
50代	985	13.4			
60代以上	375	5.1			
平均年齢	男性	42.7歳			
	女性	37.2歳			

～電子辞書の所有率、30代は2割、60代以上は5割～⁽¹⁷⁾

前述の調査からすでに4年が経過しているが、iPadをはじめとしたデジタルコンテンツの端末機登場により今後どのような発展をとげるのか、電子辞書単体機の行く末も影響が出て来ることは必至だ。

① オンライン辞典

インターネットなどを經由してPCや携帯電話、端末機などからアクセスして閲覧できる辞典の総称。この代表がウィキペディアということになるのか。もちろん、ウィキペディアはある一定のルールがあるにしても、誰が書いたものなのか、その信頼度においては大いに不安の残る問題もある。オンライン辞典の最大の強みは常に更新されるということとデータが非常に大きいということだ。無料のものもあれば、有料のものもある。同じ様な考え方のものであれば電子ジャーナルも同じ範疇に入る。

インターネット上には「オンラインで使える英英辞典 英和・和英辞典」の一覧があるので、少し長くなるが紹介しておきたい。⁽¹⁸⁾

オンラインで使える 英英辞典 英和・和英辞典

【外国語広場のコラム】

- 英語辞書についての解説「英語とのつきあい方（２）」（英英辞典）
おすすめの英英辞典の紹介やネットと PC を使った英語辞書の活用方法を解説。
- 英英辞典の比較・おすすめはユニークなコウビルド英英辞典
- 英英辞典・英語電子辞書の選び方 英語上級者向け電子辞書の比較と選び方。
- イベント：中級英語勉強会 Vital English 「英語コミュニケーション能力向上の勉強会」

オンライン辞典 の紹介		書籍版・CD-Rom 版
▼英英辞典（英語を外国語として学ぶ人向けの学習辞典）		
■<u>Longman Web Dictionary</u> (Longman Dictionary of Contemporary English & Longman Advanced American Dictionary) 学習辞典定番のロングマン英英辞典。基本 2000 単語で定義。無料。		【書籍版】<u>Longman Dictionary of Contemporary English</u> (ロングマン現代英英辞典 DVD付) おすすめ英英辞典
■<u>Oxford Advanced Learner's Dictionary</u> 伝統を誇る上級英語学習辞典。初アクセス時には、最初のページで国の選択が必要。無料。		【書籍版】<u>Oxford Advanced Learner's Dictionary</u> (オックスフォード現代英英辞典 第 8 版 DVD付)
■<u>Cambridge Dictionaries</u> Cambridge Advanced Learner's Dictionaryから検索。無料。		【 書 籍 版 】 <u>Cambridge</u>

	<u>Advanced</u> <u>Learner's</u> <u>Dictionary</u> CD-ROM 付
■Cobuild 語義を完全な文章として説明をするユニークな辞書で理解しやすい。 <u>Collins Cobuild Student's Dictionary</u> もオンラインで無料検索可能となった。 <u>セイコー電子辞書SR-G10000</u> には、Cobuildの英英辞典シリーズが搭載されている。	【書籍版】コウビルド 英 英 辞 典 <u>Collins Cobuild</u> <u>Advance Learner's</u> <u>Dictionary</u> (CD-Rom 付) おすすめ英英辞典
■Oxford系とLongmanの両方を搭載した英語最高峰の電子辞書が登場 CASIO Ex-word 電子辞書 XD-A10000 フラッグシップモデル カラー液晶 2010 年 1 月発売 New! Oxford系に加え、Longmanも収録。Oxford Dictionary of English, The New Oxford American Dictionary, Oxford Advanced Learner's Dictionary, Oxford Thesaurus of Englishなど、ネイティブ向け、学習者向け両方のオックスフォード系の主要英英辞典に加え、Longman Dictionary of Contemporary Englishをも搭載した最高峰の英語コンテンツ電子辞書。 【収録辞書コンテンツ一覧】	
▼英英辞典 (英語を母語とする人向けの辞典)	
■OneLook おすすめ 約 1000 の辞書を一括検索。主要な英英辞典、ビジネス、コンピュータ等様々な辞書を網羅。無料。	
■Merriam-Webster Collegiate Dictionary おすすめ	【 書 籍 版 】

Collegiate DictionaryとThesaurus（類義語）を無料で検索。発音も聞ける。無料。Unabridgedは有料。	Merriam-Webster's Collegiate Dictionary (CD-Rom 付)
■American Heritage Dictionary of English Language アメリカで定評ある英英辞典の第4版。9万語を収録。発音も。類義語や引用もここで検索可能。無料。	【書籍版】 American Heritage Dictionary
■Oxford English Dictionary 最大 OEDとして知られる英英辞典の最高峰。英語の歴史辞典的要素を持つ。有料でオンライン使用も可能。	【CD-Rom版】 Oxford English Dictionary 最大
■Encarta World English Dictionary マイクロソフトEncartaの英語辞典。発音も聞ける。無料。 多 言 語 : http://encarta.msn.com/encnet/features/worldwide.aspx	【書籍版】 Encarta Webster's Dictionary of the English Language
■類義語辞典 ROGET'S Thesaurus Roget's II: The New Thesaurus, 1995年の第3版 35000語を収録。無料。1922年版も。	【書籍版】 Roget's 21st Century Thesaurus
■語法 The American Heritage Book of English Usage 英語文法やスタイル、語法の解説。1996年版。無料。	【書籍版】 The American Heritage Book of English Usage
▼英英辞典を活用するための書籍	
■英語 辞書力を鍛える—あなたの英語を変える快適辞書活用術 磐崎弘定著(2002、DHC) 英語辞書の徹底的な活用法。語彙増強法など。	

■辞書からはじめる英語学習 関山健治著 (2007、小学館)

英和、英英、電子辞書を英語学習の視点から平易に解説。

▼英英辞典の充実した電子辞書

■CASIO Ex-word 電子辞書 XD-A10000 フラッグシップモデル カラー液晶 2010 年 1 月発売 New!

Oxford系に加え、Longmanも収録。Oxford Dictionary of English, The New Oxford American Dictionary, Oxford Advanced Learner's Dictionary, Oxford Thesaurus of Englishなど、ネイティブ向け、学習者向け両方のオックスフォード系の主要英英辞典に加え、Longman Dictionary of Contemporary Englishをも搭載した最高峰の英語コンテンツ電子辞書。

▼英和・和英辞典

■英辞郎 無料。アルクが提供する英和・和英辞典。収録語数が多い。

【CD-Rom版】英辞郎 第四版 New!

■ルミナス英和・和英辞典 New! 無料。学習辞典の定番。研究社。

【書籍版】ルミナス英和辞典 第2版

■Excite英和辞書 研究社英和・和英中辞典、英和コンピュータ用語辞典 無料。

■goo辞書 EXCEED英和・和英辞典、大辞林、新語辞典 無料。

【書籍版】エクシード英和・和英辞典

■ビジネス英語辞書

スペースアルク。収録語数は約1万5000語。無料。

【書籍版】プログレッシブ英和中辞典 [第4版]

■語源辞典 スペースアルク。1万語の語彙を約500の語源で整理。無料。	
■RNN時事英語辞典	
■生きた訳語・活用・用例の辞典 英引き・和引き可能。古今東西の小説の用例を具体的な文脈で。 無料。	
■Babylon 多言語に対応した翻訳ソフト。13言語、12辞書に対応。	

■英語電子辞書比較 上級者向け電子辞書の比較表

英英辞典 検索
 類義語・語源・用例

Webster's Online Dictionary
 with Multilingual Thesaurus Translation

English

Non-English

特筆すべきは、研究社『ルミナス英和・和英辞典』が紙辞書と全く同じものが掲載されていることだろう。学習辞典と言うこともあるが、用例なども丁寧である。

② i-padの登場

電子辞書とオンライン辞典の両方を兼ね備えたのがデジタルコンテンツの端末機ということになろう。携帯電話の英語辞典は単語だけの意味を確認するだけなら便利であるが、用例まで知らべるとなるとディスプレイが小さいだけにスクロールの回数も増え、不便さは否定できない。i-padはディスプレイ（タッチパネル）も大きく見やすさ比べものにならない。しかも、自分に必要な電子辞書をダウンロードしていけばmy dictionariesが出来上がる。これにオンライン辞書の機能を加えていくと、その検索能力は格段にアップすることになる。i-padに期待されているものはこうした辞書的な使い方ではなく、むしろ電子書籍の端末機としての使用である。i-padの可能性は今後の課題となろう。



i-pad



i-phone

4 紙辞書と電子辞書の比較

① 比較—それぞれの長所と短所

紙辞書（紙媒体辞書、印刷辞書）と電子辞書に関する研究も近年さかんになって来た。大崎さつき・中山夏恵「電子辞書vs印刷辞書」（2004）では次のように述べている。

近年、日本では、印刷辞書だけではなく携帯式電子辞書（以下、電子辞書とする）が普及してきている。その普及率は年々上がっており、辞書と読解に於ける研究についても注目されるようになってきた。

電子辞書には、第一に、早く検索できるという利点がある。山内(2004)は、印刷辞書の検索速度が1分間に2.4語であるのに対し、電子辞書を用いると5.1語検索出来ると報告している。くわえて、電子辞書には、多種の辞書を収録していることから、手軽で多機能であるという利点がある。ここから、Koyama & Takeuchi (2003)は、印刷辞書と比較した場合、電子辞書を使用することが学習者の辞書を検索する回数を増やす可能性を指摘している。その一方、電子辞書は、語彙検索時に、複数有る語義を確認していく手順に、スクロールの作業が必要となるため、辞書に於ける出現順序が後の方の語義を検索する際には、一度に俯瞰出来る情報量が多い印刷辞書よりも時間を要することが考えられる。⁽¹⁹⁾

山内(2004)とは山内豊「電子辞書と紙の辞書の相違と両者の使い分けに関する心理言語学的考察」(電子辞書研究会第1回大会、東京、2004年3月26日)、Koyama & Takeuchi (2003)とはKoyama, T. & Takeuchi O. “Printed Dictionary vs. Electronic Dictionaries: A Pilot Study on How Japanese EFL Learners Differ in Using Dictionaries.” (*Language Education & Technology*, 40, 2003)のことである。おそらくほとんどの研究はほぼ同じ内容を網羅することになるだろうが、電子辞書は早く検索でき、収録語数も紙辞書よりも多いことが指摘されるが、長所は短所の裏返しとなることが多く、これは電子辞書の宿命かもしれない。データ量が多い分、信の意味で検索には時間がかかることはインターネットで検索したことのある人ならばわかることだ。電子辞書になりかなり限定されても状況は変わらない。スペースや携帯性については小型化された電子辞書には紙辞書はかなわない。

② 比較研究の状況

紙辞書と電子辞書の比較研究状況についておもな研究論文等を時系列で紹介しておきたい。

- Knight, S. "Dictionary Use while Reading: the Effects on Comprehension and Vocabulary Acquisition for Students of Different Verbal Level" (*The Modern Language Journal*. 78. 1994)
- 磐崎弘貞『英語辞書力を鍛える』DHC、2002年12月
- Shizuka, T. "Efficiency of Information Retrieval from the Electronic and the Printed Versions of a Bilingual Dictionary" (*Language Education & Technology*, 40, 2003)
- Osaki, S., Ochiai, N., Iso, T. & Aizawa, K. "Electronic and Printed Versions of a Bilingual Dictionary: Accessing the Appropriate Meaning, Reading Comprehension and Retention" (*Proceedings of ASIALEX 03' TOKYO*, Japan, 3, 2003)
- Koyama T. & Takeuchi, O. "Printed Dictionaries vs. Electronic Dictionaries: A Pilot Study on How Japanese EFL Learners Differ in Using Dictionaries." (*Language Education & Technology*, 40, 2003)
- De Schryer, G-M. "Lexicographer's Dreams in the Electronic Dictionary Age." (*International Journal of Lexicography*. 16(2), 2003)
- 磯達夫・大崎さつき「電子辞書と印刷辞書にみる英文読解・語彙検索 保持の差異」(全国英語教育学会南東北研究大会発表要綱、2003年)
- 箱守知己・山内豊「辞書の引かせ方と語彙定着率の関係―紙の辞書と電子辞書を使って―」(『外国語メディア教育学会 (LET) 第44回全国研究大会発表論文集』、2004年)
- 山内豊「電子辞書と紙の辞書の相違と両者の使い分けに関する心理言語学考察」(電子辞書研究会第1回大会、東京、2004年3月)
- 大崎さつき・中山夏恵「電子辞書vs.印刷辞書」(『東京電機大学総

- 合文化研究』第2号、2004年12月)
- 寺嶋健史「英語教育における電子辞書事情：先行研究を概観して」
（『言語文化研究』第25巻第1号、松山大学人文学部、2005年9月）
- ＊「参考文献」は特に必見
- 井出清「英語教師のマルチメディア教材活用法―電子辞書最先端：
いかに使いこなすべきか―」（『英語教育』第54巻第8号、2005年
10月）
- 長谷川誠「英語学習と電子辞書」（『小山工業高等専門学校研究紀
要』第38巻、2006年3月）
- 村田年『大学生のための電子辞書活用ハンドブック』カシオ計算機株
式会社学販推進室、2006年3月
- 池田真澄「最初に教えておきたい辞書の読み方」（『英語教育』第54
巻第13号、2006年3月）
- 中畝繁「電子辞書指導の視点：必要は『使用』の母・『使用』は継続
の友」（『英語教育』第54巻第13号、2006年3月）
- 小山敏子「外国語学習と電子辞書」（『日本語学』第25巻第8号、2006
年7月）
- 小林千歳「印刷辞書と比較した電子辞書の使用」（『JACET全国大会
要綱』第46号、2007年9月）
- 阿部圭子「電子辞書の使用実態と普及の要因」（『日本語学』第26巻第
8号、2007年7月）
- 藤井数馬「紙と辞書と電子辞書の比較に関する報告」（『沼津工業高
等専門学校研究報告』第42号、2008年11月）
- Kobayashi Chiho. “The Role of Pocket Electronic Dictionaries in
EFL Learning”（『天理大学学報』第60巻第2号、2009年2月）

ここに取り上げたのはごく一部であるが、研究はさらに進むことが予想される。

5 ICT教育の今後

「おたく」が「オタク(otaku)」と表現されるようになった背景には computer, internet といった情報機器ツールや情報社会が大きく影響している。ユビキタス時代の到来は便利さと「顔の見えない」コミュニケーションが表裏一体となっている。最近の教育の関心事は「コミュニケーション能力」の回復といってもよいだろう。

『英語教育』(第54巻第13号)(2006)の特集『『辞書』の使い方・使わせ方』でも指摘されているが、紙辞書であろうと電子辞書であろうと使い方を考える必要はあるだろう。特に、学校では辞書を指定する場合もあるだけに、持たせることに意味があるのではなく、使うことに意味があるという原点に戻る必要がある。

実際、今まで印刷辞書に慣れ親しんできた多くの教師にとって、次々と新しい機能が搭載されて発売される電子辞書はおもちゃのように感じられるかもしれない。筆者自身も、学生時代は印刷辞書を愛用し、今では、印刷版に加え、CD-ROM版やオンライン辞書、電子辞書など様々なデジタル辞書を利用しており、無条件に電子辞書を薦める気はない。しかし、初めて手にした本格的な学習辞書が電子辞書という高校生も増えているという現状にあっては、学習支援ツールとして活用しようという姿勢は、教師側にも必要ではないだろうか。辞書の多様性を柔軟に受け入れて、それぞれの学習者のニーズにあった辞書を紹介し、その活用方法を教授するのは教師の責務といえるだろう。⁽²⁰⁾

ICT教育に限らず、様々な変化に対して実際には現場の教員の対応が最も困難な様に思える。今回は電子辞書を取り上げたが、電子書籍、電子教科書の本格的に導入されることもそう遠くない時期かもしれないことを考えると、生徒、学生の順応能力と教員の順応能力のタイムラグが問

題となりそうだ。

注

- (1) 藤井数馬「紙と辞書と電子辞書の比較に関する報告」(『沼津工業高等専門学校研究報告』第42号、2008年11月)、p.365.
- (2) ジェームズ一世の国書については、杉本つとむ『日本英語文化史の研究』(八坂書房、1985年4月)を参照。
- (3) 大村喜吉他編『英語教育史資料』(第1巻)(東京法令出版、1980年4月)でも「英語教育」の前身「英語学習」として、フェートン号事件を先ず取り上げている。
- (4) 伊村元道『日本の英語教育200年』(大修館書店、2003年10月)、p.6.
- (5) 「最初の英和辞典」(<http://ejje.weblio.jp/tips/guide/history>)
(2010年11月18日アクセス)
- (6) 堀孝彦『英学と堀達之助』(雄松堂出版、2001年1月)、p.173.
- (7) 宮崎ふみ子「蕃書調所」(日蘭学会編『洋学史事典』雄松堂出版、1984年9月)、p.591.
- (8) 福澤諭吉『福翁自傳』(慶應義塾『福澤諭吉全集』第7巻、岩波書店、1959年12月)、p.81.
- (9) 河村重治郎「初版へのはしがき」(河村重治郎編『新クラウン英和辞典』三省堂、1992年11月、第4版)、p.vi.
- (10) 伊村元道編『日本の英語教育200年』(大修館書店、2003年10月)、p.208.
- (11) 新村出編『広辞苑』(岩波書店、2008年1月)(第6版)、p.1944.
- (12) 「国語辞典」
(<http://dic.yahoo.co.jp/dsearch?enc=UTF-8&p=%E9%9B%BB%E5%AD%90%E8%BE%9E%E6%9B%B8&dtype=0&dname=0na&stype=0&pagenum=1&index=15598121640700>)(2010年12月10日アクセス)

- (13) 「フレッシュアイペディア」
(<http://wkp.fresheye.com/wikipedia/%E9%9B%BB%E5%AD%90%E8%BE%9E%E6%9B%B8>)(2010年12月16日アクセス)
- (14) 井出清「英語教師のマルチメディア教材活用法―電子辞書最先端：いかに使いこなすべきか―」(『英語教育』第54巻第8号、2005年10月)、p.97.
- (15) 関山健治「電子辞書の歴史とこれから」(<http://sekky.triod.com/edichist.html>) (2010年11月18日アクセス) 電子辞書の静止画も一部転載した。
- (16) 関山健治「SR-8000 (セイコーインスツルメンツ) の詳細レビュー」(<http://sekky.tripod.com/revsr8000.html>)(2010年11月25日アクセス)
- (17) 「ネットリサーチのDIMODRIVE『電子辞書』に関するアンケート」(http://www.dims.ne.jp/timelyresearch/2006/06038_2/index.html) (2010年11月15日アクセス)
- (18) 「オンラインで使える英英辞典 英和・和英辞典」(<http://www.gaikoku.info/english/dictionary.htm>)(2010年12月17日アクセス)
- (19) 大崎さつき・中山夏恵「電子辞書vs.印刷辞書」(『東京電機大学総合文化研究』第2号、2004年12月)、pp.7-78.
- (20) 小山敏子「外国語学習と電子辞書」(『日本語学』第25巻第8号、2006年7月)、p.60.